

担当者の声



JICA千葉デスク
安達夏美(あだちなつみ)さん

私のモンゴルの経験と、参加したみなさんがふだん教育現場の国際化に関して感じていることが、うまくリンクするの少し不安もありましたが、マイノリティとして過ごした私の姿と、教室での外国籍の子どもの姿を重ねてもらえたようでほっとしました。途上国の現状を知ること、異文化や世界の課題への気づきがあるだけでなく、自身や日本を見直す機会にもなり、授業や教育活動に役立てることができます。全国各地に私が所属するようなJICAデスクや、国内拠点があるのでなんでもご相談ください。



モンゴルでの安達さん。



JICAデスクはこちら!



JICA国内拠点は
こちら!

参加者の声

中学生のときに留学し、文化の違いをおもしろいと感じましたが、今日の講義から、その違いに悩むこともあると知りました。学校では言葉や知識を教えることが優先されがちですが、言葉以外のコミュニケーションの方法なども活用して、外国籍の子どもたちが学びやすい環境をつくることも必要ですね。またJICAには途上国の国際協力現場を訪問する教師海外研修というプログラムがあることを知り、ぜひ参加して自分の視野を広げ、授業にもつなげたいと思いました。



八千代市立みどりが丘小学校 教諭
荻田泰成(こもだやすなり)さん

私のクラスにも外国籍の保護者を持つ児童がいます。日本語に不自由さを覚える時もあるようですが、クラスの児童たちと一緒に、学習したリスポーツを楽しんだりして過ごしています。今日の講義を聞いて、教師としてそういう子どもたちを見守りながらも、できるだけ関わりを多くして、その子が得意な分野を見つけて自信を持てるようにしていきたいです。



八千代市立菟田小学校 教諭
湯川真由子(ゆかわまゆこ)さん

JICA千葉デスクの安達夏美さんが講師として壇上に立った。テーマは「グローバル化時代に対応した教育」。千葉県では年々在住外国人が増え、教室にも外国籍の児童が確実に増えている現状を紹介。日本語がまだよく理解できなかつたり、日本の習慣になじんでいない児童がいる教室で、教員としてどんなことができるのか、教室運営でなにに配慮すべきなのかを参加者に考えてもらいながら、国際理解教育の必要性を伝える講座となった。

安達さんは青年海外協力隊のテニス隊員としてモンゴルで活動した経験を持つ。赴任当初は、たとえば遅刻しない、練習中は先生の話を聞く、児童一人ひとりの能力に合った指導を行うなどといった日本では当たり前のことが通用せず、疎外感を感じることもあった。しかし、現地の人たちとともに過ごす時間が増え、彼らの生活習慣や大切にしていることがわかりはじめると、気持ちが落ち着いてきたという。

「モンゴルで自分がマイノリティとして感じたことは、今、日本にいる外国籍の子どもたちが感じていることに通じるはず。私が現地に溶け込めた経緯や周囲の人たちのサポートを伝えることで、言葉や習慣になじめずに悩んでいる子どもたちのサポートに役立てても

「児童だけでなく、日本語がわからない保護者へのケアも必要との具体的な意見に、教室の国際化を身近な問題としてとらえている先生方がいらつしやる現状を知ることができました」と安達さん。最後に参加者が「こうした講座は、グローバル化が進む時代には必要なこと。他者との違いを認めながらもおたがいに尊重し合える、そんな教室運営を心がけていきたい」と述べた。

国際化の波が訪れている教育現場で、国際理解教育や開発教育はますます必要になっていく。そんな現場を後押しできるよう、JICAはこれからも積極的に協力していく。

「異なる文化を理解しようとする気持ちが大切」と語る安達さんの話を熱心に聞く参加者たち。

研修には大勢が参加。

講座の最初は千葉県で外国籍の児童が増えている現状を紹介した。

グループワークのテーマは「教師という立場で、外国籍の児童にできることは?」。最後に全体で発表。

「異なる文化を理解しようとする気持ちが大切」と語る安達さんの話を熱心に聞く参加者たち。

「児童だけでなく、日本語がわからない保護者へのケアも必要との具体的な意見に、教室の国際化を身近な問題としてとらえている先生方がいらつしやる現状を知ることができました」と安達さん。最後に参加者が「こうした講座は、グローバル化が進む時代には必要なこと。他者との違いを認めながらもおたがいに尊重し合える、そんな教室運営を心がけていきたい」と述べた。

国際化の波が訪れている教育現場で、国際理解教育や開発教育はますます必要になっていく。そんな現場を後押しできるよう、JICAはこれからも積極的に協力していく。

世界につながる教室⑦ 教員研修に生かす JICAの知見

小学校初任者研修 in 千葉県

年間を通して全国各地で、小・中・高校の教員に向けた研修が多数行われている。JICAは学校現場への国際協力出前講座だけでなく、各地の教育委員会と連携して教員研修での講座も行っている。



外国籍の
児童が
増えている

研修には大勢が参加。

講座の最初は千葉県で外国籍の児童が増えている現状を紹介した。



グループワークのテーマは「教師という立場で、外国籍の児童にできることは?」。最後に全体で発表。



「異なる文化を理解しようとする気持ちが大切」と語る安達さんの話を熱心に聞く参加者たち。

教育委員会と 協力して実施

JICAでは、さまざまなプロジェクトや海外協力隊の派遣などを通して国際協力を行っている。そこで得た経験や知見を日本社会に還元して、世界の課題を「自分ごと」として考える機会を提供することで、教育現場や社会での開発教育推進をサポートしているのが開発教育支援事業だ。

その事業のひとつが教員向け研修で、各自治体の教育委員会からの要請に基づいて実施することも多い。グローバル人材の育成や多文化共生が叫ばれる今、教育現場でも教員の国際理解を深めることが求められる。JICAへの協力が要請されている。各地の教育委員会と相談し、地域の実情に合わせて、異文化理解や海外キャリア、世界規模あるいは地域規模でとらえた持続可能な開発目標(SDGs)などをテーマに講座を実施している。

マイノリティとしての 経験を語る

10月に実施された千葉県の小学校初任者研修でも1時間の講座をJICAが担当した。2019年4月に千葉県の小学校教員になったばかりの約500人が参加し、

「できればと思いました」と安達さんは語る。

相手の立場に 寄り添うことが大切

講座の最後は数人でグループになり、教員として外国籍の児童にできることを考えてもらった。「ひとりで孤独を抱えているだろうか、積極的に声をかける」「言葉がなくても身ぶり手ぶりでコミュニケーションをとったり、スポーツと一緒に楽しんだりすることはできる」「言葉がわからなくても理解できるよう写真や図を使う」「児童のルーツとなる国のことをみんなが学ぶ」など、いろいろな意見が出た。